



～ ありがとう 高瀬さん！～

7月14日、高瀬勝子さんが、満95歳で生涯を閉じられました。6月半ば、突然身体の痛みを訴えられてから25日間の闘病、末期癌でした。高瀬さんはいつもニコニコ笑顔の人で、落ち込んでいる他の利用者さんを明るく励まして、豪快に笑い声を上げ、職員には「若いうちが花だよ！」と背中をグ〜ンと押してくれるグループホームのム

ードメーカー。往診では毎回異常なく元気な様子だったので、とても驚き、なぜよりによって高瀬さんに辛い病気が襲いかかるんだらうと悔しい気持ちにもなりました。

私達グループホームのスタッフは、利用者の方の日々の食事、入浴等の手伝いは勿論ですが、「人生」という名の物語がその方らしい最終章を迎えられるように、ご家族をはじめ、看護師、主治医の皆さんと連携して支えていくのが仕事です。死の直前ばかりではなく、入居の時点から緩やかに「看取り」の気持ちを持つことも大切ではないかと思えます。

高瀬さんの場合は体調の悪化、体力の低下が急激で、医療職への適時・確実な情報伝達、連携がポイントでした。病名が判明した時、まず「どうすれば高瀬さんの苦痛をやわらげられるのか」そして、「看取る場所はえんか病院か」皆が考えました。ご家族の意向は「このまま『えん』で」とのことでした。主治医は「ご高齢なので苦痛を伴う治療はしません。緩和ケアは病院でもえんでも同じ」と言われ、一旦は「えん」に戻り痛み止め服用と皮下点滴で様子を見たのですが、急激に悪化し数日後入院、酸素吸入が始まりました。この時点で「酸素吸入が不要になれば『えん』で看取り可能。苦痛があれば再入院する。痛みが無くなればそのまま『えん』で穏やかに看取る」という判り易い基準を示してくださり、私達も迷いが生じることはありませんでした。けれども高瀬さんの口から酸素吸入のマスクを外すことはできず、病院で最期を迎えられました。

「最期まで『えん』で」という願いは叶わなかったわけです。しかし主治医が「緑が見えて馴染みの人がいる『えん』に戻してあげたいが」と介護側の気持ちを汲んで下さり、ご家族は「母は『えん』での生活を謳歌していました」と仰ってくださり、高瀬さんの最終章にささやかながら加わらせてもらえたのかなあと振り返っているところです。高瀬さんに与えていただいた数々の経験はグループホームえんの大切な財産です。有難うございました。ご冥福をお祈りいたします。

(グループホームえん／長谷川洋子)